

2年人文社会科学科「高志の国文学館訪問研修」実施

令和6年7月22日(月)、2年人文社会科学科生徒が高志の国文学館を訪問し、常設展・企画展の観覧及びワークショップを行いました。

開講式の後、職員の方から「ふるさと文学の発信について」と題して、文学館の情報発信の工夫を説明していただきました。また、クイズ形式で富山ゆかりの作品や芥川賞作家についてご紹介いただき、とやまと文学の関係について学ぶよい機会となりました。

その後、解説を聴きながら、常設展と企画展を観覧しました。

特に、企画展「しあわせにな〜れ！長谷川義史のえほん展」では、長谷川義史さんの作品に込める思いや作品の特徴、各展示室の展示の工夫など、鑑賞ポイントを丁寧に教えていただきました。



(上) 常設展観覧の様子
(下) 企画展観覧の様子



(上) 班で絵を読み解く様子
(下) 発表の様子

午後のワークショップでは、「絵本の絵を読み解く」活動を行いました。3冊の絵本を6グループで分担し、絵本の中のことば（テキスト）や絵（イラスト）の工夫をできるだけ多く探し、その上で、絵本の主題を考えました。

それらをポスターにまとめ、最後に、グループ毎に発表しました。絵本の該当箇所を指し示したり、ポスターを効果的に使ったりして工夫をこらし、説得力のある発表を心がけました。

普段意識していなかった「とやま」の文学や、小さな子どものものだと思っていた絵本が多く創意工夫の上に創作されていることを知るとともに、読む楽しさや奥深さを感じることで、貴重な機会となりました。

<生徒の感想>

- ・富山には多くの偉大な文学者がいることを知り、驚くと同時にもっと知りたいと感じた。富山には文学作品の舞台となるに値する歴史や文化が存在するとわかった。
- ・人々の心を動かし、評価され、次の世代へと語られる—この繰り返しの結果、今日私たちが文学に触れることが可能なのだと実感した。
- ・絵本作品の中には、作者が主題を読者に伝えるのではなく、読み手にその解釈をゆだねるものもあるということを知った。年を重ね経験を積むと、新たな発見や解釈ができるのだと絵本の奥深さに気付いた。
- ・今回のワークショップでは、はっきりした答えのない問題を考える難しさと面白さの両方を感じた。課題を見つけ、それを深掘りし、新しい疑問を発見することは、今取り組んでいる課題研究にも通じることだと思った。